

地域づくりへのチャレンジ

地域包括ケアシステム時代の地域づくり、まちづくりとは？ 看護・介護職による徹底した自立支援による地域づくり、コミュニティヘルスの浸透で住民の意識変化がみられたまちづくり——2つの事例を紹介する。

CASE1 一般社団法人だんだん会（山梨県北杜市）

熟達した看護・介護チームで「在宅支援」事業を展開

(一社)だんだん会理事長・看護師の宮崎和加子氏は、東京から山梨県北杜市に単身移住し同会を設立。理念に賛同する仲間たちとともに訪問看護・グループホーム等の事業を開始した。目指すのは「加齢や病気、障害があっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる」地域づくり。百戦錬磨のプロの看護・介護職による徹底した自立支援により、北杜市全体の「在宅での看取り率」日本一を目指にする。

2016年に法人化 市の公募事業でGH開設

八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、金峰山などに囲まれた北杜市の人口は約4万4,000人(2018年10月)で高齢化率は約37%。移住先として近年、注目を集め、俳優の故・菅原文太氏の移住先としても知られる。

宮崎氏は、1978年から東京都足立区にある医療法人財团健和会柳原病院地域看護課で訪問看護に従事。同会では都内に13カ所の訪問看護ステーション

(以下、ST)を立ち上げ、統括責任者を務めた。その後、関連法人の(社福)すこやか福祉会で6カ所のグループホーム(以下、GH)の開設・運営責任者として尽力。全国各地での講演活動にも奔走し、公的には2016年3月まで(一社)全国訪問看護事業協会の事務局次長、事務局長を歴任して政策づくりに向けた調査研究事業等にも関わった。

宮崎氏は次のように語る。「GH運営に携わった時に、利用者さんの“自立支援”に注力したこと、元気で明るく生活されるようになった姿を眼前にしました。特養や訪問看護でも同様に自立支援のケアを進めなければ、高齢者は“自分らしい”生活ができるないと痛感し、2000年以降は啓発に努めてきました。そして還暦を機に新たな人生の出発をと、地方の小さ

なコミュニティに軸足を置き、自分の目の届く範囲内で利用者さんや地域住民と生活を共にしながら、これまでの訪問看護や認知症ケアでの経験を生かし、在宅での“自立支援”を進められる事業を構想したのです」。

会の設立には、①営利を目的としない、②地域住民とともに、地域に役立つ医療・介護・福祉をていねいに実践していく、③誰でもが利用しやすい配慮——の理念を掲げた。「非営利」と「事業運営の継続性」を重視し、一般社団法人化を決定。理念に賛同する主に北杜市在住の医師や保健師、学識経験者等が理事・監事として参画した。

「ちょうど2015年秋に北杜市



だんだん会の法人事務所にて、宮崎和加子理事長（右奥）とスタッフの皆さん



利用者さんとじゃがいも掘りに（上）、
GH 入居者全員で勝沼に日帰りでぶどう狩りも（左）

が、認知症 GH 事業を公募すると聞き、即手挙げを決断しました。ただ応募の締め切りが 2016 年 1 月で、だんだん会の法人格を取得したのも 1 月。その頃は必要書類の作成等の事務作業に忙殺されました」と宮崎氏は振り返る。

慌ただしいスタートだったが、運営法人として選定され、翌 2017 年 3 月に「グループホームわいわい白洲」(2 ユニット) が竣工し、4 月から船出した。開設以来 18 の居室は満室で、入居者の出身地は北杜市のみならず北海道から九州まで全国各地に及んでいる。

ワークシェアリングで効率的に運営

一方で 2017 年 2 月に、訪問看護 ST「地域看護センターあんあん」を開設、同年 10 月には定期巡回・隨時対応型訪問介護看護(一体型〔看護強化タイプ〕)「定期巡回てくてく 24」を開設し巡回訪問事業も開始した。“訪問看護ステーション”との名称は使わず「地域看護センター」としたのは、在宅への訪問の仕事だけではなく他の事業も視野に入れた兼任であるこ

とから。宮崎氏は、「医療依存度の高い方へのケアや、ターミナルケアに熟練した百戦錬磨の看護師が、住民のあらゆるニーズに応えられる拠点として名付けました。安心して人生の最期まで自宅・地域で住み続けることができる地域包括ケアシステムのカギを握るのは、プロの看護職と介護職が一体となったチーム・アプローチです」と話す。

設置直後に山梨大学医学部附属病院をはじめ諏訪市、甲府市など近隣の基幹病院を軒並み訪問し、北杜市に在住する重症患者の退院・在宅復帰後の訪問看護への移行を促した。北杜市介護支援課を退職した熟練保健師が同会に参加、地域連携のキーパーソンの役割を担ったことも功を奏し、病院や地域のケアマネジャーからの紹介が徐々に増えていった。2017 年度の「あんあん」総利用者数は 87 人、在宅看取りは 23 人。1 カ月の新規利用者は平均 6.6 人と増加傾向で推移している。利用者の 41 % が医療保険を利用し、保険別収入は医療保険が 66.6 % を占め、重度の訪問看護利用者の割合が高い。

巡回訪問事業の「てくてく

24」は、利用者 3 人からの出発だったが、2018 年 11 月時点で 15 人に増えた。訪問回数は 1 カ月約 1,000 回。「あんあん」と兼務する約 4 人の訪問看護師がチームに参加する。

「看護強化タイプ」でスタートし、利用者の状態にはこだわらず、終末期・認知症・神経難病などの方でも、自宅でその人らしく、主体的に生きていただくことを心がけています。医療ニーズの高い方には 1 日 3 回、希望によっては 5 回以上の訪問も可能な体制を備えています。重度や認知症の方にきちんと対応できる、本来あるべき定期巡回サービスのモデルを示したいと思ったから」と宮崎氏は強調する。同会全体のスタッフは約 30 人。うち看護師は 10 人未満だが、熟達した訪問看護・介護スタッフが GH と「あんあん」「てくてく 24」、さらに事務等の業務も兼務することで、 “少数精銳” による効率の良い事業所経営を可能にしている。

空きペンションを利用し別荘ホスピス開設へ

このほか同会では「地域共生事業」と呼ぶ地域貢献活動を実



3カ月ごとに開催している「てくてく24」の介護・医療連携推進会議の様子。訪問診療医、薬剤師、病院の地域連携室相談員、民生・児童委員、介護支援専門員、保険者代表などが参加



施している。同会事務所とGHの2カ所にサロンを設置し、主に介護が必要になる前段階の地域住民に開放し、月に2回程度、交流会や市民講座等を行っている。参加者から企画を募ったところ、料理教室や認知症予防の勉強会、「婚活をしたい」といったアイデアも寄せられたという。

そして、このサロンをきっかけに知り合ったのが、地域にホームホスピスをつくることを目指す市民グループ「八ヶ岳根っここの会」。純粹に北杜の地を愛し、亡くなるまで、この地に住み続けたいという人たちの集まりであり、「ホームホスピス」開設を熱望するメンバーが多かった。

「でも同会メンバー、だんだん会ともに開設資金など、ほと

んどありません。そこで、国土交通省のスマート・ウェルネス住宅等推進モデル事業を知り、応募を目指して物件を探したところ、JR小淵沢駅近くに適当な物件が見つかりました。売りに出ていた空きペンションです。リニューアルした上で“別荘ライフの味わえるホスピス”を構想したのです」(宮崎氏)。

別荘ホスピス、見守り付き住宅と住民主体型サロン、重度者ケアハウスを備えた多機能型の「共生型共同住宅」創設を国土交通省に提案(共同提案者・八ヶ岳根っここの会)したところ、9月に2018年度のモデル事業(一般部門・1次募集)に採択された。

元ペンション物件は「わがままハウス山吹」と名付け、2018



空きペンションを活用した別荘ホスピス「わがままハウス山吹」は4月にオープン予定(上)。木立が見える浴室もある(下)

年12月からリニューアルに着手し、2019年3月に竣工、4月からオープンする予定だ。「基本的に入居利用は賃貸マンションなどと同じ運用になりますが、24時間見守りし、“外付け”による訪問看護や定期巡回サービスなどを付加させるシステムです。“別荘ホスピス”として長期・短期滞在、終身利用など利用者さんに多様な選択肢のあるサービスを提供していくたい」と宮崎氏は意欲的に語った。

(本誌編集専門委員 富井 淑夫)